吉本陵氏「ハンス・ヨーナスの生命の哲学――『像 Bild』概念を巡って」へのコメント

品川哲彦[1]

一、問題設定の背景

吉本陵氏（以下、吉本と略記）の発表「ハンス・ヨーナスの生命の哲学――『像Bild』概念を巡って」[2]は、ヨーナスの著書『有機体と自由――哲学的生命論への手がかり』[3]に収められた諸論文にもとづいて、進化論のなかでの人間の位置づけについてのヨーナスの論証を像概念を軸にして再構成している。吉本は、「本発表の目的は、『像』という概念がヨーナス哲学を理解する上での重要なモチーフであることを指摘することであった」と結語に記している。少なくとも、像概念が進化論（さらには生命の誕生以前までを含めれば宇宙創成論）のなかでの人間の位置づけにとって鍵を握る概念であることは明らかであるし、「神の像」という概念が人間の責任を問う文脈と交差していることも明らかである。吉本は第２節までに進化論のなかでの人間の位置づけについてのヨーナスの論証を再構成し、それを通じて上記の目的の達成に成功していると評価する。ついで、第３-４節では、不死性を論じる文脈のなかに現われる像のひとつをとりあげ、第５節では、それを介して、その像と責任という原理の文脈との関連を示している。しかし、この第３節以降の構成について若干の疑問があった。以下、それにしぼって論評したい。

二、なぜ、「天上にいる分身」だけをとりあげたのか

『有機体と自由』に収められている「不死性とこんにちの実存」のなかで、ヨーナスは、（不死性という概念にたいする疑念の強い）現代において不死性を思い描くための契機として、（吉本自身が註 23 で記しているとおり）細かく分ければ三つの話を提示している。ひとつは、イラン周辺のグノーシス思想にしばしばみられる、私たち各自がその死後に魂

1　品川哲彦（しながわてつひこ）。関西大学教授。

2　この発表は、2013 年 7 月 20 日に開催された第 20 回関西大学生命倫理研究会（於関西大学）で行なわれた。このコメントは、本号、49-56 頁に収録された当日の発表原稿にたいするものである。

3　のちに『生命という原理』と表題を変えて再版。邦訳は、『生命の哲学――有機体と自由』、細見和之・吉本陵訳、法政大学出版局、2008 年）。

となったあとに天上で出会う私たち各自の分身（私の似姿）であり、もうひとつは、聖書詩篇に出てくる「いのちの書」[4]であり、最後のひとつは、マニ教の文書のなかに語られる人間の行為を反映して天上に作られる神の像である。

これらのなかで、吉本は最初の例、天上にいる地上の人格の分身だけに焦点をあてている。なぜだろうか。もちろん、紙幅の限界はその理由のひとつであろう。しかし、その点を除いても、なぜ、天上の分身の話が優先されたのか。おそらくその理由は、図像能力の反省能力への発展――人間が自分自身を対象にした図像を描きうるようになったこと――に言及した第 2 節と、天上にいる地上の人格の分身という話は自画像という観点から他の二つの話以上に最も直接的につながるからではないかと思われる。

とはいえ、あとの二つの話も自画像という解釈を排除するものではない。「いのちの書」に書き込まれるのは各人の行為だから、そのひとの人生がそのままそこに像として残るのであり、マニ教文書にいう神の像においても、それは人間とは別の神のことではなくて、世界のたどった過程全体のことであり、したがって、世界内存在者のなかで、唯一、意図して行為する人間が関わる過程に関しては人間の行為がそこに像として刻み込まれるのである。いのちの書、神の像のいずれも人間が実際になした行為が自動的に映し出される。だがこの点でも、天上の分身だけが異なるわけではない。天上の似姿が歪められ、汚されるのは、本人の地上での行為が直接的にそこに反映するからであり、したがって、人間は自分の行為とは異なるしかたで像を歪曲したり美化したりすることはできない。

このように三者の類似性を強調すれば、吉本がそのどれを採択しても大差ないということになるかもしれない。実際、「像を媒介にした反省的な自己認識」[5]を象徴しているという点では、三者のどれもがそうなのである。しかしながら、吉本が天上の分身に焦点を当てたのは、もしかすると、この話が最も現代の実存思想に近しいものだからかもしれない。吉本の行論には直接にそれを明言する表現はない。だが、「こうしてヨーナスは不死性ないし不滅性というモデルネにおける切実な問題を議論する中で、『像』の概念を通してグノーシスの古めかしい物語の中に現代の私たちにとっても生き生きとした意味を汲み取る」[6]と

---

[4] 詩篇 69 章 29 節。ただし、詩篇では、いのちの書に記載されて永遠の生命にあずかるべきは、ヤハウェへの信仰に忠実なる者だが、ヨーナスはあらゆる人間のすべての行為が書き込まれるというふうに解釈している。この解釈は、のちの論稿「過去と真理」（『アウシュヴィッツ以後の神』、品川哲彦訳、法政大学出版局、2009 年）に受け継がれ、地上で行なわれたことのすべてがそこに書き込まれる神の記憶という概念に展開していく。

[5] 吉本陵、「ハンス・ヨーナスの生命の哲学――『像（das Bild）』概念をめぐって」、本号、35 頁/55 頁。

[6] 同上。

いう（私にはむしろ理解しがたい）一節はそれを示唆しているように思われる。理解しがたいというのは、「不死性とこんにちの実存」では近代における不死性の忘却こそが語られているのであって、だから、不死性はモデルネでは切実な問題ではないからだ。もちろん、不死性の忘却こそが切実な問題だとヨーナスは指摘するだろう。だが、それはモデルネ自身が自覚している問題ではないはずだ。すると、上の一節にいう「切実」さはどこからくるのか。私には、吉本は（不死性ではなく）この像の話自体が「現代の私たち」にとって「切実」だと直観しているのではないかと思われる。この「現代の私たち」とは、モデルネではない。ヨーナスのいうまさしく「こんにちの実存」のことである。実存は自己のあり方に関心をもたざるをえない。そのことを天上の分身の話は寓意しているのである。したがって、天上の分身の話には、ヨーナスが彼の哲学的出発点において発掘し、その後、その発掘した事態にたいする評価を一変させた、ハイデガーの実存哲学とグノーシス思想との類似性ということが鮮やかに示されているわけである[7]。

三、「像」からただちに責任概念を導出できるか

このように読み替えが可能だとすれば、吉本が第 4 節までの像概念の分析を終えて第 5 節冒頭に、「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩のもつ倫理的な含みは、『責任という原理』の主題にまっすぐ連なっている」[8]と記しているのは、私からみれば、論点が飛躍している。というのも、グノーシス思想とハイデガーの実存哲学は、ヨーナスの解釈によれば、人間を自然のなかに位置づけていないゆえに、人間が自然本性をもたず、それゆえ、従うべき規範をもたないゆえに倫理的な真空に陥っているからである[9]。まさにこの倫理的な真空を克服するために、ヨーナスは人間を自然のなかに位置づける自然哲学の創設をめざし、その成果が『有機体と自由――哲学的生命論への手がかり』となったのだった。

だからこそ、論文「不死性とこんにちの実存」はその後半部において二つの責任概念を提示して、のちの『責任という原理』への展開を示唆している。それでは、天上の分身、いのちの書、神の像を例として語られた像概念から二つの責任概念への展開はどのように

7　ハイデガーの実存哲学とグノーシス思想の類縁性、および、それについてのヨーナスの評価の変移は、彼の著書『グノーシスの宗教――異邦の神の福音とキリスト教の端緒』（秋山さと子、入江良平訳、人文書院、1986 年）所収の「エピローグ――グノーシス主義、実存主義、ニヒリズム」に記されている。また、ヨーナス、『アウシュヴィッツ以後の神』（品川哲彦訳、法政大学出版局、2009 年）に収めた拙稿「ハンス・ヨーナスの生涯」を参照されたい。

8　本号、36 頁/55 頁。

9　Jonas, *The Gnostic Religion:The Message of the Alien God & the Beginnings of Christianity*, Beacon Press, 1958, pp.333-338（邦訳、前掲、444-449 頁）。

進められたのか。テクストに明らかなように、両者のあいだには、三つの話のなかではマニ教に由来する「神の像」概念をとりいれたヨーナス自身の創作した神話、宇宙創成論が語られている[10]。天上の分身の話とマニ教における神の像の話とヨーナスの神話とのあいだにある違いは、前二者がグノーシス思想であるゆえに、至高の神ないし光の神はこの世界の創造にあずからないのにたいして、ヨーナスの神話に語られる神はこの世界の創造主であり、他の神は存在しない[11]。前二者では、人間の魂は至高神ないし光の神の領域（すなわち天上）にもともとあり、それがこの地上に投げ込まれたがゆえに、この地上（したがってまたこの地上の物質や他の生き物）とは疎外的な関係にあるのにたいして、ヨーナスの神話では、人間は神が創造したこの豊穣なる世界のなかで神の導きなしに世界内存在者がみずから進めていった進化のなかから生まれたので、この地上に属している。だが、人類は進化のなかでこの地上における唯一の意図的な行為主体となりえたがゆえに、神の創造の帰趨を左右する力をもち、したがって、この地上がこれからどのように存続していくかについての、あるいは、破滅を避けて端的に存続することについての責任を担うのである。したがって、像概念がそれだけで倫理的含意を含むわけではない。むしろ、倫理的意味をもつかどうかは、その像がいかなる文脈で語られているかにかかっているのである。

こうした論理は、ヨーナス研究者である吉本にはすでによく理解されていることにちがいない。ただ今回とりあげた論稿においては、天上の分身の話をただちに『責任という原理』に結びつけたために、あたかも、ヨーナスの神話、宇宙創成論に盛り込まれたヨーナス独自の思考の展開をとりそこねているかのような印象を与えてしまったわけである。

10　この神話は『アウシュヴィッツ以後の神』のなかでも再説される。

11　この点では、天上の分身と神の像と違って、いのちの書だけは、もともとそれがヘブライの伝統に由来するゆえに、この世界の創造主に関わっており、したがってまた、この世界に存在する人間にたいして規範を与えている。すなわち、いのちの書に自分の名を記されるということは、神にたいして義であること――もちろん、それは宗教的な意味での義であって、たんに人間関係に成り立つ倫理的な意味での正しさではないにしても、神の律法に含意されている倫理規範を遵守するという意味ではやはり倫理的であること――のあかしなのである。